

よろずは

平成二十七年

二月号

歌碑めぐり 11

狛江駅から多摩川の河川敷を行くと、繁みのなかにひとつの万葉歌碑が建っています。万葉仮名で『万葉集』巻十四の三三七三番歌「多麻川に曝す手作さらさらに何そこの児のここだ愛しき」（多摩川に曝す手作りの布のように、さらにさらにどうしてこの子がこれほどいとしいのだろう）が刻まれています。揮毫は松平定信によるものです。

この歌碑は、もともと文化二年（一八〇五）に平井董威によって多摩郡猪方村に建てられましたが、文政十二年（一八二九）に洪水によって流失してしまいました。現在の碑は大正十一年（一九二二）に拓本によって再建されたものです。

碑の裏面には文化二年十二月に建てられた経緯と、再建に尽力した渋沢栄一の文とが刻まれています。歌とともにこちらあわせてご覧ください。

ちなみに、佐佐木信綱『萬葉集事典』（平凡社、一九五六年）には「玉川碑」として紹介されています。近世における『万葉集』の享受を考えるうえで、学術的にも重要な歌碑といえるでしょう。

【万葉古代学係】



玉川碑（東京都狛江市中和泉）

【碑銘の翻刻】

多麻河泊爾左良須
豆豆久利佐良左良
爾奈仁曾許能児能
己許太可奈之伎

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。